

# 二〇二〇年度大学入試センター試験 解説 〈古典〉

## 第3問 古文 『小夜衣』

### 〔出典〕

『小夜衣』は、鎌倉時代に成立したと見られる物語である。作者・成立ともに未詳の作品だが、『源氏物語』などの影響を大きく受けていると見られる表現や内容から見て、平安時代の物語を模して書かれた、鎌倉時代に書かれたいわゆる擬古物語の一つである。

内容は、今上帝きんじょうの甥おいに当たる兵部卿ひょうぶののみか宮と、山里に暮らす大納言の姫君との恋の物語である。今回出題されたのは、冒頭に近い箇所、宮が病気の乳母を見舞った際に、同じ山里に、姫君の祖母である尼君の庵室があるのを見つけ、宰相という女房にじみ（姫君の遠縁に当たる）と面会し、姫君の祖母に当たる尼上に対する見舞いを言いつつ、姫君との仲を取り持つように宰相に促す場面である。この後、宮と姫君は恋に落ちるが、宮が親の命令で他の女性と結婚させられたり、姫君が帝に気に入られてしまったり、さらには、姫君の継母の悪だくみなどもあって、その恋はなかなか進展しない。しかし、姫君の父が継母の悪だくみを知って離縁、宮と姫君は結ばれ、二代にわたる帝の退位もあって、宮が帝に即位、姫君は皇后となる。

『落窪物語』や『住吉物語』のような継子いじめ物語の要素もあるが、一般的な継子いじめ物語では貴公子が継母を懲らしめるのに対し、父が継母と離縁したことで問題が解決に向かうというような、この物語独特の面も見られる。

近年のセンター試験本試験の古文の問題は、平安時代の物語・鎌倉時代の擬古物語・室町時代の御伽草子・江戸時代の仮名草子など、物語（小説）類からの出題が多く、本年度の出題もその傾向からはずれていない。本文の長さは過去十年の平均より二〇〇字ほど少なく、解釈が難しい和歌も含まれていないが、中盤（第二段落）の尼上の発言内容や後半（第三段落）の女房たちの様子などを正確に読み取って最後まで読み通すためには、精密に文章を読む力が必要である。

### 〔通釈〕

「ここはどこか」と、（宮が）御供の人々にお尋ねになると、（供の者が）「雲林院うりんいんと申す所でございます」と申し上げるので、（宮は）お耳にお留めになって、「宰相が通う所であろうか」と、（また、）「（姫君は）今はここに（いる）」と聞いたが、どこであろうか」と、知りたくお思いになって、御車を停

めて外を御覧になったところ、卯の花が咲いているのはどこも同じとは言うものの、垣根になって咲き続けているのは（卯の花の名所である）玉川のような感じがして、（ここは）ほととぎすの初声も（いつどこで聞けるかと）気をもむこともなく聞ける場所ではなからうかと、自然と（その様子を）知りたくお思いになって、夕暮れの頃であるので、静かに葦で編んだ垣根の隙間から格子などが見える（庵室の）様子を覗きなざると、手前のほうは仏間らしく、ささやかな閑伽棚あかだながあつて、妻戸や格子なども開け放してあり、櫛しづみの花が青々と散つて、（誰かが）花をお供えしようとして、（花を入れる器が）からからと鳴る（のが聞こえる）。それにつけても、こういう（仏教的な）面の行いも、この世でもたゆむことなく（熱心に行い）、（そのために）来世もまたたいて（極楽往生が）期待できることであるよ（と思われる）。このような（仏教的な）面は（宮としても）心にとまることであるので、うらやましく御覧になっていた。（むなしく）味気ないこの世では、このように暮らしたいものだと、（その暮らしぶりが）御目にとまって見えなざっていると、召し使いの少女たちの姿もたくさん見える中に、例の宰相のもとに仕える少女もおり、「この少女がいるのは、（やはり宰相が通う姫君の住まいは）ここなのであるうか」とお思いになるので、御供である兵衛督ひやうあかみという者をお呼びになって、（その人を介して）「宰相の君がいるのはここでございますうか」と、対面したく思っている旨を（庵室内へ）申し上げなざった。（これを聞いた宰相は）驚いて、「どういたしましょう。宮が、ここまで訪ねて来ていらつしやるのですね。畏れ多いことでございます」と言つて、あわてて（応対に）出て来た。仏間近くの南向きの部屋に、お座りになる場所などを用意して、（宮を）入れ申し上げる。

（宮は）微笑みなざつて、「このたび（この山里へ）お訪ねしてみると、（あなたが）このあたりにいらつしやるなどと聞いて（やつて参りました）、ここまで（草深い場所を）分け入つて参りました気持ちをお察しく下さい」などとおつしやるので、（宰相が）「本当に、畏れ多くも（このような場所まで）訪ねて来てくださったお気持ちには、恐縮いたします。年寄り「ニ上」が、これが最期かというほどに思つておりますために、最後まで看病しようと思ひまして、（ここに）籠こごもつて（おります）」などと申し上げると、（宮は）「そのように重病でいらつしやるというのは、お気の毒なことです。その御病状もお聞きしようと思つて、わざわざ参つたのですが」などとおつしやる。そこで、（宰相が）部屋の奥へ入つて、「このように（御見舞いの）御言葉をお聞かせました」と（尼上に）申し上げなざると、（尼上は）「そのような者「ニ重病の自分」がいると（宮が）お耳になざつて、（私は）老いの果てに、このように素晴らしい御恵みをこうむりましたので、（無駄に）生き永らえておりましたこの命も、今は嬉しく、（宮の御見舞いは）この世での（この上ない）名誉であると思われます。（宰相に）仲介させるのではなく（直接お会いして）お礼を申し上げますが、このように衰弱した状態で（ございますので）」などと、途切れ途切れに申し上げるが、それも（宮は）たいそう好ましい対応であると思つてお聞きになつていた。

（尼上に仕える）女房たちが、（こつそり）覗いて（宮の姿を）拝見すると、明るく差している夕方の月光の中で、威儀を正していらつしやる様子は、たとえようもないほどに素晴らしい。山の端から月の光が輝き出たようなその御様子は、正視できないほどに美しい。つややかさも色合いも（あたくもあなたりに）こぼれ落ちそうなほどである御着物に、直衣がそれとなく重なっている色合いも、どこに加わっている気品のためであろうか、この世の人が染め上

げたものとも思われず、(とても) ありきたりな色とは見えないその様子は、目にも鮮やかで本当に見たことがないほどに素晴らしい。(宮よりも) 見劣りする平凡な男でさえ見馴れない(女房たちの) 心には、「世の中にはこのような人もいらっしやっただなあ」と(思われて)、(皆) 心も落ち着かず褒めそやしている。(女房たちは) 本当に、(姫君の夫として宮を) 姫君に並べてみたく思われて、微笑みながら座っていた。宮が、その住まいの様子などを御覧になると、(都にある) 他家とは様子が違って見える。(仕える) 人は少なく、ひっそりとしていて、このような所に思い悩みがちであるような人「姫君」が住んでいるならばと、その心細さなどが自然にしみじみと気の毒に思われなさって、(宮は) むやみにもの悲しく思い、御袖を涙で濡らしなさりながら、宰相にも、「必ず、甲斐があるように」「姫君の気持ち自身が向くように」申し上げてください」などと言い含めてお帰りになるので、女房たちもたいそう名残惜しく感じる。

「解説」

問1 解釈の問題

まずは重要単語・重要文法を確認し、必要に応じて前後の文意も踏まえて解答したい。

(ア) 標準

「ゆかしくおぼしめして」の解釈として最も適当なものを選ぶ。

「ゆかしく／おぼしめし／て」と単語分けされる。

「ゆかしく」は、本来「心ひかれる」の意で、多くは「見たい・聞きたい・知りたい」と訳す形容詞「ゆかし」の連用形。これが正しいのは、③・

⑤。「おぼしめし」は、「お思いになる」と訳す尊敬の動詞「おぼしめす」の連用形。これが正しいのは、①・③・④。②と⑤の「し申し上げる」は謙譲の訳である。

よって、正解は、二つのポイントが正しく訳されている③である。重要単語と敬語の訳から正解は得られる。

(イ) 基礎

「やをら」の解釈として最も適当なものを選べ。

「やをら」は、「静かに・そつと」と訳す副詞。今日では「突然に・不意に」の意で使われることがあるが、誤用である。よって、正解はズバリ②である。

(ウ) 応用

「重なれるあはひ」の解釈として最も適当なものを選べ。

「重なれ／る／あはひ」と単語分けされる。

「重なれ」は、四段活用 of 動詞「重なる」の已然形。意味は、そのまま「重なる」で、これが正しいのは①・③・④。②と⑤の訳の「重ねる」は他動詞の訳で、「重なる」(自動詞)とは違う。ちなみに、「重ねる」の意であれば、単語は下二段活用 of 「重ね」であり、「重ね・重ね・重ね・重ねる・重ねぬ・重ねよ」と活用し、「重ねれ」にはならない。「る」は、存続(～している)・完了(～した)の助動詞「り」の連体形。助動詞「り」は、サ変動詞の未然形と四段動詞の已然形に接続する助動詞であり、ここでは直前の「重ねれ」が四段動詞の已然形であるから、「る」は本来「り」であるとわかる。この訳が正しいのは、完了で訳している②・③と、存続で訳している④・⑤。①は「る」が訳されていない。ここまでで選択肢は③と④に絞られる。「あはひ」は、「間」の字が当たり、一般には「間(あいだ)・間柄(あいだがら)・形勢」などの意であるが、「色の組み合わせ・配色・調和」などの意も示す名詞。この「あはひ」の意味を知っていれば、正解は④となるが、「あはひ」はやや難しい。「あはひ」がわからない場合は、傍線部を含む第三段落前半が、「似るものなくめでたし(「たとえようもないほどに素晴らしい)」、「月の光のかかやき出でたるやうなる御有様、目もおよばず。(「月の光が輝き出たようなその御様子、正視できないほどに美しい)」と、「宮」の見た目の美しさを言っており、「艶も色もこぼるばかりなる御衣(「つややかさも色合いもこぼれ落ちそうなほどの御着物)」に、「直衣」が重なっている「あはひ」が、「この世の人の染め出だしたとも見えず、常の色とも見えぬ(「この世の人が染め上げたものとも思われず、ありきたりな色とも見えない)」と、色の面でその素晴らしいさが語られていることを根拠にして、「あはひ」の意味は④の「色合い」がよさそうだと考えたい。

よって、正解は④である。

- 正解 (ア)  21  22  23  24

問2 敬語（敬意の対象）の問題 標準

波線部 a～d の敬語（奉る・給ふ・侍る・聞こえ）はそれぞれ誰に対する敬意を示しているか。その組合せとして正しいものを、次の ①～⑤のうちから一つ選べ。

まず、敬意の対象について確認しておく。

まとめ 敬意の対象

**尊敬語** 動作の主体（主語）に対する敬意を示している。

**謙譲語** 動作の受け手（相手）に対する敬意を示している。

**丁寧語** 話の聞き手に対する敬意を示している。

- ・ 会話文中の丁寧語 その会話の聞き手（会話の相手）に対する敬意を示している。
- ・ 地の文の丁寧語 読者に対する敬意を示している。

**a** 「奉る」は、謙譲の補助動詞である。謙譲語であるから、動作の受け手（相手）に対する敬意を示す。「入れ奉る」は、「宰相」が、訪ねて来た「宮」を室内へ「入れる」のである。よって、「入れ奉る」は、「宮」が受け手（相手）であるから、a の「奉る」は、「宮」に対する敬意を示していることになる。a が正しいのは ①・②・③ である。

**b** 「給ふ」は、尊敬の補助動詞である。尊敬語であるから、動作の主体（主語）に対する敬意を示す。b を含む会話部分は、宮が庵室を訪問した理由を「宰相」に述べている箇所だ。「このほど尋ね聞こゆれば、このわたりにもやし給ふなど聞きて」は、「この度（こちらの山里を）訪ね申し上げると、このあたりにいらっしゃるなどと聞いて」という意味である。「ものし」は、「あり・行く・来」などの代わりに用いられるサ変動詞「ものす」の連用形で、ここでは「あり」の代わりとして用いられている。要は、「ここにいと聞いてやって来た」と言っているのである。この「いる」の主体として考えられるのは「宰相」か「姫君」であることになるが、選択肢には「姫君」はないので、b の「給ふ」は、動作の主体である「宰相」に対



する敬意を示していることになる。bが正しいのは①・②・⑤である。

c 「侍る」は、丁寧の補助動詞である。丁寧語であるから、話の聞き手に対する敬意を示す。cを含む会話部分は、bで見た「宮」の言葉をうけて、「宰相」が「御訪問は畏れ多い。尼上が重病なので最期を看取ろうと、ここに籠もっていた」と返事をしている場面であるから、話し手は「宰相」であり、話の聞き手は「宮」である。よって、cの「侍る」は、「宮」に対する敬意を示していることになる。cが正しいのは①・③である。

d 「聞こえ」は、「申し上げる」と訳す、謙譲の本動詞。謙譲語であるから、動作の受け手(相手)に対する敬意を示す。ここは、「尼上の見舞いに来た」という「宮」の言葉を受けて、「宰相」が、部屋の奥へ行つて、そこにいる人(大病で寝ている「尼上」と考えるべき)に、「かうかうの仰せ言こそ侍れ(＝宮からこのような御見舞いの御言葉をいただきました)」と申し上げたのである。よって、「聞こえ」の動作の主体は「宰相」、動作の受け手(相手)は「老人」「尼上」であるから、dの「聞こえ」は、「老人」に対する敬意を示していることになる。dが正しいのは①・③・⑤である。

以上から、正解は①である。

センター試験の問2は多くは文法問題で、数年に一回のペースで敬語に関する問題も出題されてきたが、二〇二〇年度は前年度に続いて、二年連続敬意の対象の問題が出題された。

正解 24 ①

問3 内容説明の問題 標準

傍線部A「うらやましく見給へり」とあるが、宮は何に対してうらやましく思っているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

傍線部直前の、「このかたのいとなみも、この世にてもつれづれならず、後の世はまたいと頼もしきぞかし。このかたは心にとどまることなれば」は、「こういう仏教的な面の行いも、この世でもたゆむことなく熱心に行い、(そのために)来世もまたたいそう(極楽往生が)期待できることであるよ。このような仏教的な面は(宮としても)心にとまることであるので」という意味である。二箇所ある「かた」は「方」の字が当たり、「方角・方法・方面」などと訳される名詞で、ここでは「このかた」で「こういう方面」の意であるが、最初の「このかた」の直前に書かれている「こなたは仏

の御前と見えてくからからと鳴るほども」は、「手前のほうは仏間らしく、ささやかな閑伽棚があって、妻戸や格子なども開け放してあり、櫛の花が青々と散って、（誰かが）花をお供えしようとして、（花を入れる器が）からからと鳴る（のが聞こえる）」という意味で、この庵室に住まう人が熱心に勤行（仏教修行）していることが書かれているのであるから、「このかた」は「こういう仏教的な面」の意と考えたい。宮は、自身にとっても、仏教は「心にとどまること」なので、日々仏教的行いにいそしんでいると見えるこの庵室での暮らしぶりを「うらやましく」思っ見て見ているのである。よって、このことを正しく説明している③が正解である。

①は「極楽浄土のように楽しく暮らす」が誤り。「この世」で仏教的行いに励めば「後の世（来世）」に極楽往生が期待できるとは書かれているが、山里の暮らし自体が極楽浄土のようだと書かれていない。

②は「姫君と来世までも添い遂げようと心に決めている」が本文になく、うらやましさの対象も「姫君のそばにいる人たち」ではないので誤り。

④は「来世のことを考えずに暮らすことのできる姫君」が誤り。宮は、「この世」でこのように仏教的行いに励めば「後の世」に極楽往生が期待できると感じているのである。この庵室に住む人が「来世のことを考えずに」暮らしているとは見ていない。また、本文中に姫君は登場しておらず、この仏教に熱心な暮らしぶりをしている人は、庵室の主である尼上であるとすることはできても、姫君に限定することはできない。

⑤は、「自由に行動できない身分である自分」が本文からは読み取れない上に、傍線部の直前に書かれていることを全く踏まえていないので、誤りである。

正解 25 ③

問4 心情（傍線部の発言を生んだ心情） 説明の問題 応用

傍線部B「つてならでこそ申すべく侍るに」とあるが、尼上はどのような思いからこのように述べたのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

登場人物の心情はその人の会話文やその人が詠んだ和歌にあらわれやすく、ここでも尼上の心情は、尼上自身の会話文、「さる者ありと御耳に入りてくかく弱々しき心地に」から読み取るべきである。

「さる者ありと御耳に入りてくかく弱々しき心地に」は、「そのような者」「重病の自分」がいると（宮が）お耳になさって、（私は）老いの果てに、

このように素晴らしい御恵みをこうみましたので、(無駄に) 生き永らえておりましたこの命も、今は嬉しく、(宮の御見舞いは) この世での(この上ない) 名誉であると思われます。(宰相に) 仲介させるのではなく(直接お会いして) お礼を申し上げるべきでございますが、このように衰弱した状態で(ございますので)と訳される。傍線部「つてならでこそ申すべく侍るに」は、「つて」が「人づて」の意、「で」が「くなくてくはないで」と訳す打消の接続助詞、「侍る」が「くですくます」と訳す丁寧の補助動詞であるから、「人づてではなくて申し上げるべきですが」、つまり、「直接申し上げるべきだが」の意である。この会話文は、「宮の見舞いはありがたく、生きていてよかった、この上ない名誉である。直接お会いしてお礼を言うべきだが、衰弱していてできない」と言っているのである。

よって、正解は、このことを正しく踏まえて説明している⑤である。

尼上は姫君については一言も言及していないので、①の「姫君と宮との仲を取り持って、二人をお引き合わせ申し上げるべきだ」、②の「この折に姫君のことを直接ご相談申し上げたい」は誤りである。

③の「宮から多大な援助をいただける」も、そのような事実は本文には書かれておらず、当然「つてならで」の意味も「(援助を) 直接お受け取り申し上げる」という意味ではない。

また、尼上は仏道についても述べてはいないので、④の「仏道について直接お教え申し上げます」も本文からは読み取れない。

正解 26 ⑤

問5 心情説明の問題 標準

傍線部C「笑みみたり」とあるが、この時の女房たちの心情についての説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

「この時の女房たち」の様子には第三段落冒頭の「人々、のぞきて見奉るに」から、傍線部直前の「げに、姫君に並べまほしく」までに書かれており、その内容は、「女房たちが、宮の姿を覗き見すると、月に照らされたその姿はたとえようもなく素晴らしく、宮自身が月であるかのように美しい。着ている衣の美しい色合いも見ることがないほどで、平凡な男さえも見馴れていない女房たちには、『世の中にはこんなに素晴らしい人もいるのだなあ』と思われる、皆で褒めそやしている。本当に、宮を姫君と夫婦として並べて見たく思われる」というものである。特に、傍線部直前の「姫君に並べまほしく」が、「宮を夫として姫君に並べてみたく」の意であることを理解しなくてはならない。



よって、その内容を正しく説明している②が正解である。

①の「普段から上質な衣裳は見馴れている」「姫君の衣裳と比べてみたい」、③の「噂以上の」「姫君が宮を見たらきつと驚くだろうと想像し」、④の「仏道に導き、姫君とそろって出家するように仕向けることができた」、⑤の「これまで平凡な男とさえ縁談がなかった姫君」「宮が釣り合うはずがないとあきれている」は、いずれも本文に書かれていなかったり、本文の内容と合致しなかったりして、誤りである。

正解 27 ②

問6 内容説明(内容合致)の問題 応用

この文章の内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。(傍線部なし)

この設問は、問い方は右のようであるが、要は内容合致問題である。

①は、第一段落四行目の「やをら葦垣の隙より」以降に相当する選択肢だが、まず、「美しい女性の姿を見た。この人こそ噂に聞いていた姫君に違いないと確信した」が誤りである。宮は、その庵室に住む人の「仏事にいそしむ」生活ぶりは見ているものの、姫君らしき人の姿は見えていない。「かの宰相のもととなる童べ(例の宰相のもとに仕える少女)」を見かけて、「ここにや(やはり宰相が通う姫君の住まいはここなのであろうか)」と思っているだけである。また、御供の兵衛督を仲介として宰相を呼び出した宮は、尼上の病気を気づかう旨などを話して(第二段落)、「す•ぐ•に(姫君との)対面の場を設けるように宰相に依頼した」わけではない。姫君との対面を促している言葉は、帰り際の、「かまへて、かひあるさまに聞こえなし給へ(必ず、甲斐があるように「姫君の気持ちがお自分に向くように」申し上げてください)」(第三段落の最後の一文)だけである。

②は、第一段落八行目の「御供なる兵衛督といふを召し給ひて(御供である兵衛督という者をお呼びになつて)」から第一段落の最後までに相当する選択肢だが、まず、「宰相は、兵衛督を呼んで、どのように対応すればよいか尋ねた」が誤りである。本文によれば、宮が兵衛督に命じて、「宰相の君はこれにて侍るにや(宰相の君がいるのはここでございますか)」と言わせて、宰相を呼び出したのである。宰相が兵衛督を呼んだり、相談を持ちかけたりした事実はない。また、宰相が宮を入れた部屋については、「仏のかたはらの南面(仏間近くの南向きの部屋)」と書かれているだけである。「尼上と姫君がいる」とは書かれていない。第二段落の内容から尼上は奥の部屋にいることがわかるが、姫君は本文全体を通して一度も登場していない。

③は、第二段落の尼上の会話文「さる者ありと御耳に入りて…」から第二段落の最後までに相当する選択肢だが、まず、「自分の亡き後のことを宮に頼んだ。姫君についても大切に後見するよう懇願」が誤りである。ここの尼上の会話文、「さる者ありと御耳に入りてくかく弱々しき心地に」は、「宮の見舞いはありがたく、生きていてよかった、この上ない名誉である。直接お会いしてお礼を言うべきだが、衰弱していてできない」という内容である。「亡き後のこと」や「姫君」については一言も言及していない。また、「姫君との関係が自らの望む方向に進んでいきそうな予感を覚えた」も誤り。尼上の言葉を伝え聞いた宮については、「いとあらまほしと聞き給へり（＝たいそう好ましい対応であると思ってお聞きになっていた）」（第二段落の最後）と書かれているだけである。

④は、第三段落に相当する選択肢であるが、「宮はこの静かな山里で出家し、姫君とともに暮らしたいと思うようになった」が誤りである。第三段落では、宮の様子は、「宮は、所の有様など」以降に書かれているが、その内容は、「宮は、庵室の様子を見て、このように寂しげな所で姫君が物思いがちに暮らしているのなら気の毒なことだと悲しみ、姫君との対面をかなえてくれるように宰相に促して帰った」というものである。自身の「出家」や「姫君とともに暮らしたい」という思いについては全く言及していない。

⑤は、ほぼ第三段落後半に相当する選択肢で、「宮は山里をく言い残した」は、④で見た「宮は、所の有様など」以降に書かれている宮の様子に合致していて誤りがない。また、「女房たちは宮のすばらしさを思い、その余韻にひたっていた」も、第三段落最後の「人々も名残多くおぼゆ（＝女房たちもたいそう名残惜しく感じる）」に相当して誤りはない。「女房たちは宮のすばらしさを思い」は、第三段落前半「人々、のぞきて見奉るにくめでまどひあへり」に書かれていることを踏まえていて、ここにも誤りはない。

よって、正解は⑤である。

正解 28 ⑤

第4問 漢文 『文選』(雑詩下 謝靈運「田南に園を樹て、流れを激し援を植う」)

〔出典〕

『文選』は、六朝時代の梁の昭明太子(五〇一〜五三一年)が編纂した詩文選集。全六〇巻。周から梁に至る約一〇〇〇年間の詩・文の選集で、収められた作品は七六〇編、作者は一三〇人にのぼる。後世、文学を志す人の必読書として広く読まれ、日本にも早く伝わり、平安時代の王朝文学に大きな影響を与えた。

謝靈運(三八五〜四三三年)は、六朝時代の宋の詩人。名門として知られた陳郡陽夏(河南省太康県)の貴族の出身で、宮廷文人として重用されたが、自負心が強く野心家で、政治面での処遇には不満が多く、不遇であった。財力にあかせて山水に遊歴し山水詩人として知られ、ほぼ同時代の陶淵明と並び称せられる。のち、謀反の嫌疑を受けて広州に流され、処刑された。六朝時代を代表する詩人である。

〔書き下し文〕

樵隱俱に山に在るも 同じからざるは一事に非ず 園中氛雑を屏け 室を下して北の阜に倚り 澗を激めて井に汲むに代へ 群木既に戸に羅り 靡迤として下田に趨き 欲を寡なくして勞を期せず 唯だ蔣生の徑を開き 賞心忘るべからず	由来事同じからず 痾を養ふも亦た園中 清曠遠風を招く 扉を啓きて南の江に面す 澗を挿えて壙に列るに當つ 衆山亦た窓に対す 迢迢として高峰を瞰る 事に即して人の功罕なり 永く求羊の蹤を懐ふ 妙善冀はくは能く同にせんことを
--	--

〔通釈〕

木こりと隠者とはともに山に暮らしてはいるが、(山に暮らす)理由は同じではない。同じでないのは一事に限ったことではなく、都の生活で疲れた心身を癒やすのもこの庭園のある住居の中。この住居にあつて俗世のわずらわしさを払い除き、清らかで広々とした空間は遠く吹き来る風を招き寄せる。家を北方の岡を背にした地に占い定め、門扉を開けば南を流れる川が眼前にある。谷川の水を引き込んで井戸で水を汲む代わりとし、むくげの木を植えて家のまわりの垣根とする。多くの樹木が連なり続く道をたどって下の畑に行き、はるか遠くの高い峰を眺める。うねうねと連なり続く道をたどって下の畑に行き、はるか遠くの高い峰を眺める。欲をすくなくして苦勞は求めず、あるがままに従つて人の手はかけ過ぎない。ただ蔣詡しやうくのように庭に小径を作り、いつも求仲や羊仲のような友が訪ねてくれることを思う。美しい風景をめぐる心を忘れてはならない、この上ない幸福を友とともにわかち合いたいものである。

〔解説〕

問1 語の読みの問題 (ア) 基礎 (イ) 基礎

波線部(ア)「俱・(イ)「寡」のここでの読み方として最も適當なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

- (ア)「俱」は、「とも二」である。「共・与・偕・同」も「とも二」の読み方がある。正解は⑤。  
 ①「たまたま」は「偶・会・適」。②「つぶさに」は「具」。③「すでに」は「既・已」。④「そぞろに」は「漫・坐」である。  
 (イ)「寡」は「すくなシ」と読む字で、「少・鮮」も同じ。対義語は「おほシ」で、「多・衆・庶」など。いずれも、漢文の学習上の重要語である。王侯の自称・謙称である「寡人」が、「人徳の寡い私すくな」の意であることで覚えておきたい。正解は③「すくなくして」。  
 ①「いつはりて」は「偽・詐・佯」など。②「つのりて」は「募」。④「がへんじて」は「肯」。⑤「あづけて」は「預」。

正解 (ア) 29 ⑤ (イ) 30 ③ (各4点)

問2 返り点の付け方と書き下し文の組合せ問題 標準

傍線部 A「由来事不同、不同非一事」について、(a) 返り点の付け方と、(b) 書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の ①～⑤のうちから一つ選べ。

二〇一八・二〇一九年度は、書き下し文と解釈の組合せ問題であったが、この、返り点の付け方と書き下し文の組合せ問題も、類出の形式である。ポイントとは、傍線部の中に、再読文字や、疑問・反語・否定・使役・受身などの何らかの句法上の読み方の特徴がないかということ、書き下し文のように読んだときの文意が通るか、また、その文意が前後の文意にあてはまるかどうか、である。返り点は、本当はそのような返り方（付け方）が文の構成上アリなのか？ ということはあるのであるが、ともかく読み方どおり返っているようにしているケースがふつうなので、返り点の付け方をチェックするのは時間の無駄である。

この「由来事不同、不同非一事」では、句法上のポイントは、否定の基本形の「不」と「非」、いずれも返読文字で、「不」は活用語の未然形から返読して、「ず」。「非」は体言あるいは活用語の連体形プラス「ニ」から返読して、「あらず」である。

「不」の読み方については、どの選択肢も間違っていない。

「非」は、「…に非ず」と読んでいるのは、②と③のみ。①・⑤のように「非とする」と読むことも、④のように「非を」と名詞に読むことも、できなくはないが、「…に非ず」としている選択肢がありながら、そうでないのが正解ということはないと言ってよいであろう。

また、前半にも、後半にも、「不同」を、「同じからず」にしている選択肢と、「同じうせず」にしている選択肢の配分がある。「同じからず」であれば、「同じでない。異なっている」の意であるが、「同じうせず」であれば、「共通しない。一致しない。関与しない。合わせない」などの意になる。前半の、「由来事（＝木こりと隠者が山中に暮らしている理由は…）」とのつながりから考えると、前半部①・②、後半部②・⑤の「同じからず」のほうが適当である。

こうしたポイントが見えない場合は、書き下し文のように読んだときの文意が通るか、文脈にあてはまるかをチェックすることになるが、文意が通るのも、文脈にあてはまるのも、②「由来、事は同じからず、同じからざるは一事に非ず（＝山に暮らす理由は同じではない。同じでないのは一事に限ったことではない）」しかない。

正解 31 ② (8点)



問3 詩中の四句の情景の読解の問題 応用

傍線部B「卜<sub>レ</sub>室倚<sub>二</sub>北阜、啓<sub>レ</sub>扉面<sub>二</sub>南江、激<sub>レ</sub>澗代汲<sub>レ</sub>井、挿<sub>レ</sub>槿当<sub>レ</sub>列<sub>レ</sub>塘」を模式的に示したとき、住居の設備と周辺の景物の配置として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

詩句に描かれた情景（住居の設備と周辺の景物の配置）を図で答えるという、非常に珍しい形式が出た。センター試験としての最終年度に突如「新傾向」というのもどうかと思われるが、次年度以降の「共通テスト」に向けたメッセーじもあるのかもしれない。見ない形でも、一瞬面食らうが、要は、傍線部Bの読解の問題である。

「室を下<sub>レ</sub>して北の阜に倚り」は、「家を北方の岡を背にした地に占い定め」という意味である。この点は、選択肢①～④はいずれも間違いはない。図では、上方が北ということである。

「扉を啓きて南の江に面す」は、「門扉を開けば南に流れる川に面している」ということであるから、川的位置は①～④いずれも正しい。ポイントは「扉を啓きて」である。南を流れる川に「扉を啓」いているのは、②と③である。①・④は、南に門がなく、東にある。

「澗を激めて井に汲むに代へ」は、「谷川の水をせきとめて（引き）井戸で水を汲むかわりとし」であるから、庭に井戸がある①・③は間違い。図では左の川から水を引いている②・④が正しい。

「槿を挿して塘に列るに当つ」は、「むくげの木を植えて家のまわりの垣根とする」の意。木を植えた垣根になっているのは①・②。③・④は土塀のようになっていない。

よって、正解は②である。

正解 ③2 ② (8点)

問4 詩中偶数句末の空欄補入問題 標準

空欄 C に入る文字として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

詩中の偶数句末の空欄補入問題は押韻の決まりの問題である。

一般に押韻は、絶句や律詩などの近体詩の決まりとして学んでいるが、長い古体詩でも、偶数句は韻をふむ。判断としては、日本語の音よみで母音

のひびきが大体同じものをチェックすることになる。偶数句末の字の音よみと、韻の種類を見ておく。

同（ドウ・平声東韻）、中（チュウ・平声東韻）、風（フウ・平声東韻）、江（コウ・平声江韻）、壩（ヨウ・平声冬韻）**C**、峰（ホウ・平声冬韻）、功（コウ・平声東韻）、蹤（シヨウ・平声冬韻）、同（ドウ・平声東韻）。

次に選択肢に並んでいる字の音よみである。

- ① 窓（ソウ・平声江韻）○
- ② 空（クウ・平声東韻）×
- ③ 虹（コウ・平声東韻）○
- ④ 門（モン・平声元韻）×
- ⑤ 月（ゲツ・入声月韻）×

「中（チュウ）」「風（フウ）」などの音もまじって、完全にそろっているようには見えないが、主なひびきが「オウ（ou）」であることはわかるであろうから、可能性があるのは、①「窓（ソウ・sou）」か、③「虹（コウ・kou）」である。

次に考えたいのは、「群木既に戸に羅り」と「衆山亦た**C**に対す」が「対句」であることである。つまり、**C**に入るものは、「戸」と対になる語でなくてはならない。とすれば、答は「窓」である。そもそも、「虹」が出ているかどうかは、判断のしようがない。

正解 **33** ① （8点）

問5 詩句の表現に関する説明問題 応用

傍線部D「靡迤趨下田、迢遞瞰高峰」の表現に関する説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

まず注意しなければならないのは、「適当でないもの」を選ぶという点である。

傍線部D「靡迤として下田に趨き、迢遞として高峰を瞰る」そのものは、「靡迤」と「迢遞」には（注8・9）があるから、おおむね、「うねうねと連なり続く道をたどって下の畑に行き、はるか遠くの高い峰を眺める」という意味である。

前半の表現の説明になっている①と、後半の表現の説明になっている③は、「靡迤」と「迢遞」がいずれも「音の響きの近い語の連続」であることも許容範囲であるし、①の「山のふもと」の田園風景がどこまでも続いている、③の「山々がはるか遠くのすがすがしい存在である」も、「どこまで

も「すがすがしい」がやや根拠に欠けるが、おおむね正しいと言えよう。

あとの②・④・⑤は「対句」についての説明になっている。対句になっている語についての説明はいずれも誤りがない。

②は、「住居の周辺が俗世を離れた清らかな場所である」が、前書きや、第五句の「**気雑**（注5 俗世のわずらわしき）を**屏**け」などから考えて、合っていると見えよう。

④は、「垂直方向」が「高峰を瞰る」、「水平方向」が前半の句に相当する。

⑤は、「田畑を耕作する俗世のいとなみが、作者にとつて高い山々をながめやるように遠いものとなった」が間違いである。そもそも、作者自身が「下田」で「耕作」しているのかどうかも不明である。

正解 34 ⑤ (9点)

問6 詩に込められた作者の心情説明の問題 応用

傍線部E「賞心不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>忘、妙善冀能同」とあるが、作者がこの詩の結びに込めた心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

選択肢を見ると、ここは、傍線部Eだけでなく、その直前の二句、「**唯**だ**蔣**生の**徑**を開き、永く**求**羊の**蹤**を懐ふ（＝ただ蔣詔のように庭に小徑を作り、いつも求仲や羊仲のような友が訪ねてくれることを思う）」から見必要がある。「蔣生」には（注11 漢の蔣詔のこと。自宅の庭に小徑を作って友人たちを招いた）が「**求**羊」には（注12 求仲と求羊のこと。二人は蔣詔の親友であった）がある。「**蹤**」は「足あと」のことであるが、つまりは、その「小徑」を訪れたということである。

そして、傍線部E「賞心忘るべからず」は、「賞心」に（注13 美しい風景をめぐる心）とあり、選択肢では、ほぼすべてに共通している、「美しい風景も（は）くながめ」ることを言っているのであろう。

「**妙**善**冀**はくは能く同にせんことを」も、やはり、「親しい仲間と一緒に」、（注14）「この上ない幸福」を味わいたいということである。

ポイントは、選択肢の末尾で、「蔣生」が庭に「徑」を作ったのは、求仲・羊仲のような親友に来てほしかったからであるから、作者も、そのような友人が住居を訪ねてくれることを待っているということである。よって、④の「どうか我が家においてください」が正しい。

①「遠慮なく何でも言ってください」、②「私のことはそっとしておいてください」、③「我が家のことを皆に伝えてください」、⑤「時々思い出

してください」は、いずれも最も言いたいこととはズレる。

正解

35

④

(9点)